

ベルンハルト・シュリンク著  
松永美穂訳

## 『逃げてゆく愛』

新潮社（二〇〇一年）

先ごろ、ドイツ国内では一本の映画が好評を博していました。その名も「グッバイ・レーニン!」。タイトルからもうかがえるように、旧東ドイツを揶揄したコメディ作品です。

映画は、ドイツ統一前に昏睡に陥った母親が再び目を覚ますと、祖国東ドイツがなくなっているという設定。医者から、母親に二度と精神的ショックを与えないように注意されていた息子は、以前と何も変わらないかのように必死で取り繕います。が、窓から見えるコカ・コーラの巨大な広告、旧西ドイツ地域から引越してきた隣人との関係など、次から次へと騒動が起こって…（『ドイチユラント』二〇〇三年八／九月号）。

一見、他愛無いコメディ作品のようにですが、素直にコメディとして受け取れないところに、今日のドイツが抱える問題の根深さがあります。ベルリンの壁が崩壊してすでに十年以上経ちますが、今なおドイツの人々を隔てる「心の壁」は残されたままだからです。

さて、そのようなドイツが抱える複雑な事情を、何気ない普段の日常生活の視点から描いたのが本書『逃げてゆく愛』です。著者は、『朗読者』で一躍世界的に名を馳せたB・シュリンク。こちらは日本でもベストセラーとなりましたので、

ご存知の方も多いのではないのでしょうか。本書は七つの物語からなる著者初の短編集です。

ここには、妻をも密告する旧東ドイツ秘密警察の実態を描く「脱線」、一枚の絵からナチス時代の父親の秘密に迫る「少女とトカゲ」など、ドイツ固有の過去と向き合う作品の数々が収められています。テーマがテーマだけに気が滅入りそうになりますが、そこは人気作家（兼法律家!）. ときに日常のコミカルな風景や、最近の若者の風俗などを巧みに物語に織り込み、読者をあきさせません。また何より、一方の側を単に糾弾するだけでなく、彼らにさえ愛情を持つて接する描き方には、著者の人間性に対する深い信頼が感じられます。読む者を温かい気持ちにすらさせてくれます。

前作『朗読者』では、戦争犯罪の責任を問われたハンナが、裁判官に向かって静かに「あなただったら何をしましたか?」と問いかける場面がありました。本作品でも、時代設定は様々ですが、こうした問いかけが物語の底流にありまます。「過去の克服」とは何か。自らの問題として考えていきたいものです。

渡邊 暁彦（教育学部講師）



スタンレー・コレン著  
石山鈴子訳

## 『左利きは危険がいっぱい』

文藝春秋（一九九四年）

人間の約九割は右利きであるということを知っていましたか。では、猫では右利きと左利きの割合が同程度であるということは？日本のような車両左側通行の道では、左利きのドライバーよりも右利きのドライバーのほうが事故を起こしやすいというのはほんとうでしょうか。母親の出産年齢が高くなるにつれて、生まれる子供の利き手が左になる可能性が高まるということを知っていましたか。昔から左利きには天才や芸術家が多いと言われていたそうですが、これは事実でしょうか。

この本には、利き手についてのありとあらゆる話題が詰まっています。文化や宗教において右と左が持つ意味、右脳の働きと左脳の働きについて世間に行き渡っている「科学的な噂(?)」など、どれも興味深いものですが、中でも情熱を込めて語られるのが、人口の約一割を占めるという左手利きの人たちです。著者自身の研究の経過と成果を中心に、左手利きの人たちの特徴についてこれまでに得られてきた数多くの知見が（うーん?、と思つようなものもありますが）並べられています。

乏しい研究費をやりくりして研究を進めてきた、という事情のためか、研究方法もユニークです。紀元前三千年から現

代にいたるまでの絵画を調べ、そこに描かれた人物がどちらの手を使っているかを確かめることによって、それぞれの時代に於ける左手利きの割合を推定したり、『ベースボール・エンサイクロペディア』に載っている二十人以上の野球選手の記事から、選手の手と寿命のデータを抜き出して両者の関係を調べたり、といった具合です。そのようにして検証されてきた仮説が、邦訳のタイトルである、『左利きは危険がいっぱい』ということになるわけです。

ところで、著者は、「左利きの人は目立たない」言い換えれば右利きの人は、周囲の誰かが左利きであってもそれに気づかないことが多いと述べていますが、実際にそうなのでしょうか。ちよつと自分の周囲のことを考えてみると、たしかに、左利きは自分の弟とその娘くらいしか思い当たりません。割合から言えば知人の十人に一人は左利きのはずなのですが……やはり、右利きの私は左利きの人に気づきにくいのでしょうか。

谷上 亜紀（経済学部助教授）

